

生涯スポーツイベント参加者の大会満足度

—菜の花マラソン参加者のスポーツライフスタイルによる比較—

北村 尚浩*, 川西 正志*, 波多野義郎*, 柳 敏晴*, 萩 裕美子*,
前田 博子*, 野川 春夫**

The satisfaction of participants in the lifelong sports event compared with their sports lifestyles

Takahiro KITAMURA*, Masashi KAWANISHI*, Yoshiro HATANO*,
Toshiharu YANAGI*, Yumiko HAGI*, Hiroko MAEDA* and Haruo NOGAWA**

Abstract

Recently, many sports events have been held throughout Japan. They vary from the national events, e.g. *the National Sports and Recreation Festival* and *the National Festival for Health and Welfare* to the local event e.g. running or walking event in the community. Especially, sports events in community are expected to promote or to enlighten the lifelong sports. However, increasing with sports event and rivaling each other cause some problems like the reduction of participants and giving up to hold the event.

In such a situation, "*Ibusuki Nanohana Marathon (Nanohana Marathon)*" which is held in Ibusuki, Kagoshima prefecture, has been raising the number of participants since its first meeting in 1982. At *Nanohana Marathon*, over 1,000 volunteers support the event and there are many participants who have loyalty to the event. It is often mentioned as one example of sports event, which succeeds in the community.

Then the purpose of this study was to empirically classify participants of *Nanohana Marathon* by sports lifestyle, and to compare the satisfaction about *Nanohana Marathon* within the classified groups. The main results are as follows:

1. Participants of *Nanohana Marathon* were classified into three groups by cluster analysis based on sports lifestyle score.
2. The satisfactions of participants about *Nanohana Marathon* have kept at a higher level.
3. There are some differences in satisfaction between groups that classified by sports lifestyle.

These results show that there are a variety of participants in lifelong sports event and there are differences in their satisfaction. Therefore, on the view of promoting lifelong sports, when managing the sports event, it is important to be concerned with these points.

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

** 順天堂大学 Juntendo University School of Health and Sports Science Hiragagakuendai, Inbamura, Chiba, Japan

KEY WORDS: *Ibusuki Nanohana Marathon, participants, satisfaction and sports lifestyle*

I. 緒 言

地域の活性化やスポーツの振興を目的として、全国各地で多くのスポーツイベントが開催されている。特に、地域社会における生涯スポーツイベントは、「全国スポーツレクリエーション祭（通称スポレク祭）」や「全国健康福祉祭（通称ねんりんピック）」などの全国規模のものから、市町村レベルで開催されるランニングイベントまで、多岐にわたっている。市町村レベルでのスポーツイベントは、1988年の「ふるさと創生一億円事業」を一つの契機として、マラソン・ランニング大会を中心に多く開催されるようになった。しかし、その一方で、イベント数の増加や競争によって参加者数の伸び悩みや減少といった事態を招いていることも指摘されている（山口, 1996）。

そのような中において、鹿児島県指宿市で毎年1月に開催されている「いぶすき菜の花マラソン」は、1982年に「指宿温泉マラソン」として第1回大会が開催されて以来、着実に参加者数が増加してきた。現在では県内外から1万数千名の参加者を集め、その運営にあたっては、公募によって集められた1,000名あまりのボランティアが中心的役割を果たしている。また、固定層の参加者、すなわち大会に対してロイヤルティを持っている参加者が多いことも示唆されており（野川ら, 1991）地域における生涯スポーツイベントの成功事例といえよう。

地域における生涯スポーツイベントの成功のためには、参加者の満足度が重要な要素の一つであることは否めない。高い満足度はリピーターを生み出し、やがて参加者の定着に至ると考えられる。その一方で、多様化する参加者の満足度を維持していくことも重要な課題である。菜の花マラソン参加者の大会満足度についてはこれまでも報告されているが、本研究では、多様な参加者をスポーツライフスタイル（北村ら, 1996）によって類型化し、満足度がどのように異なるのかを明らかに

することを目的としている。

II. 方 法

1. 研究の対象

本研究では、鹿児島県指宿市で毎年1月に開催される「いぶすき菜の花マラソン（以下、菜の花マラソン）」の参加者を対象とした。指宿市は人口約3万人の町で、菜の花マラソンをはじめウォーキング、トライアスロンなどの大会を開催し多くの参加者を集めていることから、地域イベント型のスポーツ都市の成功事例として挙げられている（山口ら, 1996）。

2. 調査の概要

本研究では、1999年1月10日に鹿児島県指宿市で開催された「第18回いぶすき菜の花マラソン大会」参加者への質問紙調査を行った。ゴール地点において、事前にトレーニングされた調査員が所定の質問紙を用いて、フルマラソン完走者に対してインタビュー調査を実施した。その結果、326名から回答を得た。なお、本大会のフルマラソン完走者は、男性6,411名、女性1,627名の計8,038名であった。

調査内容は、1) 個人的属性、2) 菜の花マラソン参加状況、3) 運動実践者意識、4) スポーツライフスタイル、4) 大会満足度等に関する項目である。

3. 分析方法

サンプルの類型化には、スポーツライフスタイルに関する項目（北村ら, 1996）を用いた。5段階のリッカート・タイプ尺度によって測定されたスポーツライフスタイルに関する項目を得点化し、Ward法によるクラスター分析を行ってサンプルを類型化した。そして、各クラスターのスポーツライフスタイルを明らかにするため、それぞれのクラスターごとにスポーツライフスタイルに関する各項目の平均得点を算出し、比較した。

次に、スポーツライフスタイルによる大会満足度の違いを検討するために、大会満足度項目を「満足しなかった」から「満足した」までの4段階の評定順にそれぞれ1～4の得点を与えて数量化し、平均得点を算出して各クラスター間で比較した。有意差の検定にはそれぞれF検定を用いた。

Ⅲ. 結果および考察

1. サンプルの属性 (表1)

性別では男性が8割近くを占め(77.3%)、年齢別では20歳代以下が最も多く(35.0%)、次いで30歳代(28.2%)、40歳代(21.5%)と年齢が高くなるにつれて少なくなっている。鹿児島県内

表1 サンプルの属性

		n	%
性別	男性	252	77.3
	女性	52	16.0
	N.A.	22	6.7
年齢	20歳代以下	114	35.0
	30歳代	92	28.2
	40歳代	70	21.5
	50歳代	39	12.0
	60歳代以上	5	1.5
	N.A.	6	1.8
居住地	鹿児島県内	134	41.1
	鹿児島県外	192	58.9
職業	自営業	5	1.5
	公務員	84	25.8
	会社員	117	35.9
	主婦	5	1.5
	無職	4	1.2
	その他	111	34.0
	N.A.		
最終学歴	中学校卒	5	1.5
	高等学校卒	129	39.6
	短大・専門学校卒	36	11.0
	大学卒	111	34.0
	その他	25	7.7
	N.A.	20	6.1

からの参加者(41.1%)よりも県外からの参加者の割合(58.9%)が多い。職業については、会社員と回答した者が35.9%にのぼり、その他と答えた者も34.0%を占めた。最終学歴は、高等学校卒(39.6%)、大学卒(34.0%)、短大・専門学校卒(11.0%)の順であった。

2. マラソン参加 (表2)

菜の花マラソンへの参加状況は、初参加者よりもリピーターが多いことが明らかになった。また、フルマラソン参加についても、8割近くが2回目以上の参加である。また、マラソンの練習頻度は週5日以上と回答した者が最も多く(47.9%)、練習を積み重ねて大会へ参加している様子が見える。その一方で、週1回未満と回答した者が約1割見られた。また、半数以上がマラソン以外のスポーツ活動も行っていることが明らかになった。

菜の花マラソンへの今後の参加意向については、90%以上が参加の意向であり、参加者にリピーターが多いことを裏付ける結果である。

表2 マラソン参加状況

		n	%
菜の花マラソン参加	初参加者	113	34.7
	リピーター	213	65.3
フルマラソン参加	初参加者	73	22.4
	リピーター	253	77.6
練習頻度	週1回未満	31	9.5
	週1～2回	50	15.3
	週3～4回	89	27.3
	週5回以上	156	47.9
参加意向	参加する	299	91.7
	参加しない	26	8.0
	N.A.	1	0.3
スポーツ実施	行っていない	150	46.0
	行っている	176	54.0

3. 大会参加者の類型化

スポーツライフスタイルに関する項目によるクラスター分析の結果、サンプルは表3に示すように3つのクラスターに類型化された。第1クラスターが全体の7割を占めて最も多く、以下第2クラスター、第3クラスターの順であった。各スポーツライフスタイル要因ごとの平均値(表3)及び、マラソン参加状況やスポーツ実施状況を比較したところ(表4)、各クラスターの特性は次のようにまとめられる。

第1クラスターは健康志向が強く、スポーツのみならず多方面に対する興味を広く持っている。マラソン以外にもスポーツを実施しており、スポーツを核としたコミュニケーションや積極的なスポーツ参加を好む、「スポーツ愛好者」のグループといえよう。第2クラスターも健康志向、レジャー探索とも比較的高い値を示しているが、流行・革新やコミュニケーション、コミュニティなどのスコアは他の2つのクラスターほど高くなく、スポーツを通してのコミュニケーションや積極的なスポーツ参加への志向も強くない、「気軽な参加者」のグループである。マラソン初参加者や参加意向が否定的である者の割合が最も多いクラスターである。第3クラスターは、勝利志向が強くスポーツを核としたコミュニケーションを志向しない一方で、スポーツによる健康づくりやスポーツ以外への興味も他のグループと比べて強くない。マラソンの練習頻度が他のグループよりも多く、マラソン以外のスポーツ実施者の割合が最も低いことから、「アスリート」のグループであると考えこ

表3 クラスター分析の結果

	Cluster 1	Cluster 2	Cluster 3
	73.2%	22.6%	4.2%
流行・革新	5.99	3.11	5.92
コミュニケーション	7.07	4.80	4.58
スペクテーター	8.43	7.58	3.92
健康	8.90	8.46	3.17
コミュニティ	7.40	4.88	5.08
美意識	7.34	5.60	4.75
レジャー探索	8.56	8.08	3.25
勝利	6.50	4.60	6.50

とができる。

4. 大会満足度

サンプルの大会満足度を数値化し、その平均値を表5に示している。ほとんどすべての項目で3.0以上かそれに近い値を示しており、菜の花マラソンに対する参加者の大会満足度は、概ね高いことがわかる。特に高い値を示しているのは、「ボランティアの対応」(3.77)や「給水・ドリンクサービス」(3.69)など、開催地の人々による直接的なホスピタリティに対する満足度が高いことがわかる。また、「開催場所」についても比較的高いスコアを示した。すなわち、指宿で開催されるイベントであることが、参加者にとって意味を持っていることが示唆される。別の言い方をすれば、野川ら(1991)の研究で明らかにされてい

表4 各クラスターのマラソン参加状況

	Cluster 1	Cluster 2	Cluster 3
	73.2%	22.6%	4.2%
菜の花マラソン参加			
$\chi^2=.398$ d.f.=2 N.S.			
初参加者	34.3%	38.5%	33.3%
リピーター	65.7%	61.5%	66.7%
フルマラソン参加			
$\chi^2=.414$ d.f.=2 N.S.			
初参加者	22.4%	26.2%	25.0%
リピーター	77.6%	73.8%	75.0%
練習頻度			
週1回未満	5.7%	20.0%	8.3%
週1~2回	16.2%	15.4%	0.0%
週3~4回	29.5%	21.5%	33.3%
週5回以上	48.6%	43.1%	58.3%
参加意向			
参加する	93.3%	86.2%	100.0%
参加しない	6.7%	13.8%	0.0%
スポーツ実施			
$\chi^2=4.20$ d.f.=2 N.S.			
行っていない	42.4%	52.3%	66.7%
行っている	57.6%	47.7%	33.3%

表5 大会満足度

	Mean	S.D.
広報	3.41	0.60
開催場所	3.55	0.58
利便性	2.97	0.84
開催時期	3.25	0.79
大会参加費	3.21	0.81
支給品	3.23	0.76
コース	2.98	0.81
トイレの設置	2.84	0.92
給水・ドリンクサービス	3.69	0.51
ボランティアの対応	3.77	0.47
参加者間の交流	3.16	0.74
大会全体の満足度	3.57	0.56

るように、菜の花マラソンに対する参加者のロイヤルティが高いということができよう。一方、比較的低い値を示したのは、「トイレの設置」「利便性」「コース」などであった。トイレの数や場所については、以前から他の項目と比較して満足度が低く、まだ改善の余地が残されているようである。また、利便性については指宿市へのアクセスが必ずしもよくないことを示している。さらに菜の花マラソンのコースは高低差が大きいこともあり、やや難易度の高いコースと言える。そのことが「コース」の満足度に現れていると考えられる。

ところで、第8回大会(1989年)と第9回大会(1990年)における参加者の大会満足度についても、過去に報告されている(野川ら, 1990)。調査項目のワーディングや尺度に若干の違いがあり厳密に比較することはできないが、ボランティアの対応や大会運営全般に関してはほとんどの参加者が満足しており、現在まで約10年もの間、高い水準を維持していると考えられる。一方、トイレの場所や数、コースに対しての満足度は以前の報告でも低い水準にあった。これらは菜の花マラソンに限ったことではなく、マラソン大会特有の課題と言え、改善するには限界もあるであろう。菜の花マラソン参加者が順調に増加しつづけ、1万数千人が参加するビッグイベントに成長してきていることを考えると、ヒューマンタッチな運営によってカバーされている問題のようである。いずれにしても菜の花マラソンの参加者の大会運営についての満足度は、18回目を迎えた現在も高い水準にあり、そのことが参加者の大会に対するロイヤルティ生み出し、リピーターの確保に結びついていると考えられる。

次に、スポーツライフスタイルによって類型化された統計的集団間で、満足度がどのように異なるのかを明らかにするため、各クラスターごとに満足度の平均値を算出して比較した(表6)。F

表6 各クラスターの大会満足度

	Cluster 1 n=210	Cluster 2 n=65	Cluster 3 n=12	F-Ratio
広報	3.44	3.28	3.27	2.04
開催場所	3.58	3.43	3.58	1.60
利便性	2.99	2.71	3.09	3.08*
開催時期	3.28	3.13	2.92	1.97
大会参加費	3.22	3.21	2.75	2.49
支給品	3.26	3.17	2.92	1.44
コース	3.03	2.86	2.75	1.63
トイレの設置	2.96	2.54	2.75	5.60**
給水・ドリンクサービス	3.67	3.75	3.67	0.76
ボランティアの対応	3.74	3.82	3.83	0.85
参加者間の交流	3.19	2.91	3.58	5.85**
大会全体の満足度	3.57	3.54	3.58	0.11

*p<.05 **p<.01

検定による有意差検定の結果, 「利便性」「トイレの設置」「参加者間の交流」の3項目で有意な差があることが明らかになった。

「利便性」ではクラスター3が最も高い値を示し, 以下クラスター1, クラスター2の順であった。クラスター2は気軽に参加している集団と考えられ, そのことが利便性に対する満足度の低さとなって現れていると思われる。一方, クラスター3はどちらかというマラソン競技そのものを目的としている集団であることが, 競技成績に直接影響する「コース」や「開催時期」などの満足度が低いことからその特性が裏付けられる。「トイレの設置」で最も高い値を示したのはクラスター1で, 以下クラスター3, クラスター2の順であった。先述のとおり, トイレの場所や数については参加者全体の満足度も相対的に低い, 特に, クラスター2のような気軽にフルマラソンに参加しようという集団に対しての配慮が必要なようである。「参加者間の交流」についてはクラスター3が最も高い値を示し, 次いでクラスター1, クラスター2の順であった。クラスター2はもともとスポーツを核としたコミュニケーションを志向する集団ではないことが, 数値に表れた結果と捉えることができよう。

IV. 結 語

生涯スポーツイベント参加者を類型化し, 大会満足度がどのように異なるのか, 鹿児島県指宿市で開催されている「いぶすき菜の花マラソン大会」参加者を対象として検討を進めてきた。主な結果は次のようである。

1) スポーツライフスタイルによってサンプルを類型化したところ, 3つの統計的集団に類型化された。そして, スポーツライフスタイル及びマラソン実施状況からそれぞれの集団を, 「スポーツ愛好者」「気軽な参加者」「アスリート」と命名した。

2) 過去の大会における調査報告との比較から, いぶすき菜の花マラソン参加者の大会満足度は, 第18回大会を迎えた現在でも概ね高い水準を保っていることが明らかになった。特に, ボランティ

アの対応や給水・ドリンクサービスなど, 開催地の人々による直接的なホスピタリティへの満足度が高いことがわかった。そのような中であって, トイレの設置やコース, 利便性への満足度が相対的に低いことが明らかになった。

3) スポーツライフスタイルによって類型化された統計的集団によって, 大会満足度に違いがあることが明らかになった。

これらの結果から, 生涯スポーツイベントの参加者はそのスポーツライフスタイルによっていくつかの統計的集団に類型化されることが明らかになった。このことはすなわち, 生涯スポーツイベント参加者の多様性を裏付けている。また, 大会運営に対する満足度も, 参加者のタイプによって異なることが明らかであり, この点に配慮した大会運営が必要であろう。生涯スポーツ推進の視点から考えれば, 気軽に参加することができ高い満足度が得られれば, その後の運動・スポーツ継続の動機付けの一つとなることも可能であろう。

生涯スポーツイベントは, その多くが開催する地域の活性化という役割を担っている。回を重ねるごとに参加者数が着実に増加してきた菜の花マラソンは, その役割を十分に果たしてきたと言えるだろう。今後も, 参加者が高い満足度を維持できるような大会運営がなされることを期待するとともに, 多様な参加者に対する生涯スポーツ啓蒙の機会の一つとして, 大会が発展していくことを望む。

謝 辞

本研究のデータ収集及び統計処理にあたっては, 鹿屋体育大学大学院の大学院生ならびに鹿屋体育大学生涯スポーツ学講座の学生諸君に多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表します。

参考文献 (References)

- 1) 天野郡壽・山口泰雄・神吉賢一・岡田明 (1992) ウォーキングイベントの参加者研究(2)―ウォーカーの期待と満足―, 日本体育学会第43回大会号 A : 171.

- 2) 神吉賢一・山口泰雄・天野都壽・岡田明 (1992) ウォーキングイベントの参加者研究(1)―ウォーカーの社会的背景―. 日本体育学会第43回大会号 A : 170.
- 3) 北村尚浩・富山浩三・川西正志・湯川孝裕・山内照代・久保和之 (1996) スポーツ参加者の類型化に関する研究―スポーツに対する志向から―. 鹿屋体育大学研究紀要15 : 33-40.
- 4) 北村尚浩・川西正志・池田勝 (1997) スポーツ参加者のスポーツライフスタイルとコミュニティ感情. 体育学研究第41(6) : 437-448.
- 5) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠・池田勝・三浦嘉久 (1990) 地域活性化におけるスポーツイベントの総合研究調査報告書. 鹿屋体育大学 : 鹿児島.
- 6) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(1)―イベント参加者の視点から―. 鹿屋体育大学研究6 : 57-67.
- 7) 山口泰雄 (1996) 生涯スポーツとイベントの社会学. 創文企画 : 東京.
- 8) 山口泰雄・野川春夫 (1996) スポーツ都市づくりと地域振興に関する研究. 平成7年度文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書. 神戸大学 : 兵庫.

(平成11年12月8日 受付)
(平成12年2月4日 受理)